

2025年5月18日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教37「神の招き」

申命記7：6～8、ヨハネ6：60～71

イエスさまは、わたしたちを生かす命のパンとして来られました。さぞかし皆喜んでこれを受け入れたかというところではありません。今日のところには「実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか」（60節）とあります。これはイエスさまと対立していたユダヤ人の言葉ではありません。イエスさまを慕ってついて来た弟子たちの言葉です。そしてついには「このために、弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなった」（66節）のです。喜んでイエスさまという命のパンを受け入れたのではない。そんなものは要らないと言って捨て去ったのです。それが弟子たちの反応でありました。

また、ここには「十二人」という言葉が三回繰り返されます。この十二人はもちろん十二弟子を意味しますが、それを後の「教会」と解釈することもできます。ある人は、ヨハネ福音書では「十二人」という言葉は全部で4回出てくる。そのうちの3回が今日の部分に集中し、あと1回はトマスのところに出てくると言います。20章に「十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは」（20：24）とあります。イエスさまのよみがえりが信じられない疑い深いトマスの話です。教会にとってネガティブなところにこの「十二人」が使われるのです。十二人の中から裏切り者が出て、十二人の中に疑う者がいる。それが強調されています。

でも一方で十二人の中には、この時のペトロのように「あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。あなたこそ神の聖者であると、わたしたちは信じ、また知っています」（68～69節）これは当時の教会の信仰告白であったと言われます。しかしそのペトロもこの後イエスさまを三度も知らないかと否定します。他の福音書を見ると、ペトロは「あなたはメシア、生ける神の子です」と信仰告白をしたすぐ後にイエスさまの十字架を否定したことでイエスさまから「サタン、引き下がれ」と叱責される。今日のところでユダも悪魔と呼ばれますが、ペトロもイエスさまから「サタン」と呼ばれたのです。それは他でもない教会の弱さ、脆さです。ここには信仰告白と裏切りという相反するものが同居しています。

「実にひどい」（60節）という言葉は、「頑な」とか「固い」という意味があります。英語の翻訳では「ハード」と訳している聖書もあります。固くて飲み込めない。これは受け入れられない、手に負えないということでしょう。イエスさまの話は簡単に受け入れられるものではない。誰が聞いてもすぐにわかるというものではないのです。わたしたちはそういう受け入れやすい話を望んでいるかもしれませんが、でもイエスさまの話はつまずきを与える、受け入れにくいものなのです。でもそこに真理があります。

先月の終わりに一日時間を作りまして広島に行きました。戦後80年の節目にあって良い機会でした。驚いたのは海外の方々がほとんどだったということです。広島駅から平和記念公園までのバスは満員でしたが、日本人はわたしたち夫婦ともう一人くらいでした。原爆ドームは世界遺産ですし、また今の世界情勢もあるのでしょうか。平和への関心が大きいのだと思います。原爆資料館に行かれた方はわかると思いますが、その悲惨さを目の当たりにして皆言葉を失います。海外の人たちも同じでした。展示室を出ると無言で座り込んでしまう。泣いている子どももいました。わざわざ日本に来て、そういう戦争の悲惨さを子どもたちに見せる。本当に

ハードな内容です。でもひどい話だ、受け入れられないと目を背けるのではなくて、そういう現実を直視する。その中でこそ見えてくる世界があります。わたしは今回広島に行ってイエスさまがまことの人となられたことの意味、イエスさまが担われたものはこういうことなのだと改めて教えられました。

イエスさまの救いは、わたしたち人間の肉体、その罪の悲惨にまで入り込むものです。イエスさまの受肉から十字架、復活、昇天という一連の御業はすべて肉体を伴うものです。罪ゆえに神さまから遠く離れていたわたしたちを神さまの御国に引き上げ、つなぎとめるために、神さまはまことの人となられました。わたしたちのところまで降りてきてくださり、わたしたちの存在を御自分のものとして受け入れ、十字架で死んで、よみがえってくださった。そのようにして罪を贖われます。そして天に昇られ、わたしたちを神さまの子どもとして迎え入れてくださったのです。

神さまが人になられ、しかも十字架で死んで三日目によみがえられる。このことはどんなにわたしたちが頭で考えてもわからないことです。それは聖霊の働きによって初めて受け入れられることなのです。「命を与えるのは“霊”である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である」(63節)とあります。聖霊によってイエスさまが命のパンとして御自身を与え尽くされたことがわかります。そこにわたしたちの生きる本当の命があるのです。それは神さまの子どもとして新しい生きる命です。教会はこのことを語り続けなければなりません。どんなにひどい話だと言われようとも、聞くに耐えないと言われようとも、これはイエスさまから託された使命なのです。

十二人の中に、教会の中に裏切り者がいる。悪魔がいる。教会の中に信仰告白と裏切りが同居しています。でもイエスさまは言われます。「あなたがた十二人はわたしが選んだのではないか」(70節)と。わたしがあなたがたを選んだ。イエスさまはその現実をあえて受け入れておられます。これは単に「清濁併せ呑む」というレベルの話ではありません。その現実をすべてご自身のものとして、ご自身の肉体の中で贖われる神さまの恵みの招きです。使徒信条で「聖なる公同の教会を信ず」と告白するとき、わたしたちは汚れも何もない教会を信じているわけではありません。破れを抱えていても、つまずいても、ひどい話だと愛想つかしても、それでもあなたはわたしのものだ、わたしがあなたがたを選んだとおっしゃってくださるイエスさまのゆえに、わたしたちは教会を信じるのです。これは理屈ではありません。信仰なのです。そしてこれは誰にも妨げられるものではありません。

天の父よ。あなたを裏切り、離れ去るわたしたちでも、あえてあなたはわたしたちを招いてくださいます。「わたしがあなたがたを選んだ」その恵みにあって、わたしたちはイエスさまの御体である教会に招かれました。それゆえに、イエスさまが十字架におかかりになられ、そしてよみがえってくださいました。どうぞこの恵みの招きに応えて生きる者とさせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。